

シリーズ・日本の図書館（２）

《知の宝庫》

｜ 天理大学附属天理図書館を訪ねて ｜

鈴木 秀子^É

私大図書館協会の研究部会の一つである、西洋古版本研究分科会の夏期合宿として天理市を訪れたのは、**1998**年の**9月20**日、台風の合間を縫った訪問だった。

真紅の彼岸花が夏草の緑に映える鄙びた車窓の風景や、宇治、桃山といった風雅な駅名を楽しみながら、**JR** 奈良線、桜井線と乗り継いで、天理市へと向かった。東京から新幹線を使って**5**時間弱の旅である。

天理市は、説明するまでもなく、市全体が天理教という、部外者から見れば不思議な空間である。電車を降りて駅前のアーケードに足を踏み入れると、あちらこちらから黒地に白で＜天理教＞と染め抜いたはっぴ姿が目飛び込んで来た。

アーケードの数メートルおきに、「真柱継承奉告祭、**10月25**日、立教**161**年」と大書した横断幕が張られ、初めて訪れた私には比較のしようもないが、街は心なしか活気づいているように感じられる。後で聞いたところによると、ひと月後に控えた「継承奉告祭」とは、教団のトップである現三代真柱（しんぱしら）が自分の息子に真柱の地位を譲る継承の儀式なのだという。

その日の午後は、「天理参考館」を各々見学というスケジュールになっていた。参考館は天理市の中心である天理教の神殿、「おやさとかた」の**4**階にあり、内外の民族資料、考古美術資料など総資料数**2万5**千点を蔵

^Éすずき・ひでこ / 文献情報課

する。またビザンティン床のモザイクコレクションなども知られている。国立民族博物館ができるまでは、関西で一番の内外民族、民俗資料の宝庫であった。博物館の内部はひんやりとして人気がなく、所せましと世界の民族・民俗資料が展示してあり、ひととおり眺めるだけでもかなりの時間を要した。

その日は、各々ホテルや詰所（地方からきた天理教の信者さんのための宿泊所）に1泊。翌21日月曜日、朝9時半から丸1日かけて、今回の合宿の主目的である天理図書館の見学を行った。

1 合宿の準備

今回参加したメンバーは計11名。関東のあちこちの大学の図書館員で構成されているが、中には在野の研究者もあり、今回の合宿のみ参加というメンバーも含んでいる。

今回の合宿の眼目の一つは、図書館見学というだけでなく、天理図書館の蔵するコレクションの中から、西洋古版本に限らず、それぞれの関心のある資料を実際に見せていただくことである。そのために5月頃から準備を進めてきたが、少なからぬ大学図書館員が「一度は天理図書館を見てみたい」という思いを抱いていたようで、正会員6名という小さな分科会にもかかわらず、この企画に11人もの参加者が集まった。

知人を通じて天理図書館の藤井さんに見学の内諾を得た後、参加者それぞれに閲覧したい資料名を出してもらい、一覧表を作った。天理図書館からは、あらかじめ、国宝、重要文化財指定資料は除くようにとの制限を受けていた。作成した一覧表を藤井さんに送り、閲覧できるかどうかの意向を打診。資料の保存状態などにより閲覧できないものをはずしたり、数を減らしたりした末、再度一覧表を作り（図1）、8月の始めに図書館長あての正式な見学依頼書と共に天理図書館に送った。

貴重書閲覧希望リスト (図1)

I. 洋書

1. Rodericus Zamorensis, Spiegel des menschlichen Lebens, 1479. Augsburg (人間の鑑)
2. Schedel, Hartmann, Liber chrinicarum, 1493. Nuremberg (シェーデル年代記)
3. Ptolemaeus, Claudius, Cosmographia, 1490. Rome (プトレマイオス, コスモグラフィア)
4. Balbus, Joannes, Catholicon, 1460, Mainz (カトリコン) 一葉
5. Bible in Slavonic, 1581, Ostrog, Ivan Fedorov (旧新約聖書)
6. William, Shakespear's comedies, histories, and tragedies. 3rd folio
7. Vita et fabulae (Francesco del Tuppo 訳), 1485, Napoli, (Tuppo 版イソップ)
8. 15世紀以前の写本 (資料の指定はありません)
9. 紋章学関係図書
 è ex. John Guillim, A display of heraldrie 等
10. ビザンチン様式の製本の図書 (資料の指定はありません)

II. 和書

1. きりしたん版 (資料の指定はありません)
2. 木活字の図書を数冊 (年代や書肆の違い等で特徴のあるものを希望)
3. 『拾芥抄』 天文17年 (1548) 写 および刊本
4. 『日本分形図』 寛文6年 (1666) 刊 1冊
 è 3, 4 は、『天理ギャラリー 95 回展古地図の中の日本』の目録より
5. 『好色一代男』 上方版、江戸版
6. 嵯峨本『徒然草』 慶長期刊
7. 南総里見八犬伝稿本
8. 『平家物語』 (竹柏園本)

III. その他

1. Indulgence, 1347 Avignon (免罪符)
2. コーラン (16世紀? ペルシャ)
3. 木活字植字台及び木活字 (江戸末期)
4. 版木
 è 3,4 について、本の指定はありません
5. 満州語、蒙古語訳聖書

以 上

夏休みが明けて9月、天理図書館の斉藤さんより電話で正式にお返事をいただいた。残念なことに、保存上の理由から貴重書庫の見学はできないとのこと。また、閲覧資料も常設展示室でのガラス・ケースごしの見学となるとのこと。近年、閲覧規則が改定になり、以前より非常に厳しくなったようだ。がっかりしたが、しかたがない。これだけの資料を私たちの見学のために展示して下さるだけでも、大変な作業である。

参加メンバーの岩田さんは、別途、個人用の閲覧許可願いを天理図書館に送り許可を得ることができた。岩田さんは、天理図書館所蔵のオストローク版スラヴ語聖書の調査のために今回の合宿に参加したので、同聖書のリプリント版を持参して、葉数の照合や書き入れ、ウオーターマークなどの詳しい調査を行う予定であった。

2 天理大学附属天理図書館

いちよう並木に縁どられた天理図書館（写真1）は見るからに重厚な建物である。現在の図書館は昭和5年に、ミネソタ大学図書館の応募設計図の一つを元として建てられ、その後、昭和38年に増築したものである。すでに70年近くの年月を経ているが、その古さが伝統と風格を醸しだしている。



写真1

天理図書館はその正式名称「天理大学附属天理図書館」が示すように、（通常の大学図書館なら天理大学附属図書館、あるいは天理大学図書館のような名称となるだろう）たんなる大学附属図書館ではない。もともとの成り立ちが違うのである¹。大学の図書館はその大学の設置に必要な附属

¹ 濱田泰三編「やまとのふみくら」（1994, 中公文庫）

機関として存在するのが一般的だが、天理図書館は形式的には大学の附属機関だが、その成り立ちは天理大学とは独立している。天理大学（前身は天理外国語学校）があつて天理図書館ができたのではなく、天理図書館はむしろ、全国にいる天理教の信者、あるいは伝道者のための図書館として出発したのである。この志は、利用規程の閲覧対象が、天理大学教職員・学生及び一般（満**15**才以上）とあるように、また、大学教員用の蔵書とは別に天理図書館独自の収集方針を持っていることなどに現れている。

3 図書館見学

図書館正面の石造りの階段を上り、入口の扉を開けるとすぐ右横に受付がある。そこでは天理高校生のアルバイトであろうか、天理教の黒いはっぴをきた青年がノートを広げていた。受付の奥は正面ホールになり、吹き抜けの天井からシャンデリアがさがっている。（写真2）ちょうど正面が出納カウンターになっていて、その後ろに書庫に通じるドアが見える。**15**才以上なら誰でも利用できるというオープンさの反面、全面閉架式である。古めかしいカード目録ケースと**OPAC**用の端末が同居している様子は、昨今の図書館員にとってはなじみ深い



写真2

光景である。受付の青年に取次を頼み、案内をして下さる天理図書館の斉藤さんが私たちを迎えてくださった。二階の会議室に案内され、斉藤さんより、図書館の概要説明を受けた。

図書館の蔵書数は約**180**万冊、うち天理図書館内には**140**万冊を収蔵するが、その内、いわゆる貴重書、特別書は**40**万冊に昇るという。「知の宝庫」という異名をとるのもうなづける。内容は当然ながら、宗教関係（何故か仏教関係は少ないとのこと）、語学関係、国文学（中山家からの寄贈本を核とし

た「綿屋文庫」からの発展)、国史関係などが充実している。もちろん、私たちの分科会となじみふかいインキュナブラ(揺籃本)の所蔵数も国内では群を抜いている。わが明治大学の蔵書数とほぼ同じであることを思うと、その趣は大きな隔たりがある。そしてこの40万冊に昇る貴重書コレクションの核を形成したのが、二代真柱中山正善氏である。氏が内外の稀覯書を収集するにあたって、古書肆弘文荘・反町茂雄氏との交友関係や、コレクションの内容は、反町氏がその多数の著書に詳しく書いたこともあって、つとに有名である。その後のコレクションの増加は往時ほどではないが、収集方針は今もそれを継承しているという。

さて、いよいよ図書館見学。ここからは、洋書の目録をとっておられる瀬川氏が案内をしてくださった。先ほどのホールの左手を抜けて、まず閲覧室を見学したが、(写真3)月曜の開館ほどない時間というせいもあってか、利用者はほとんどなく、まるでヨ・ロッパの古い図書館か、教会堂に足を踏み入れたような錯覚を覚える。

その後、一般書庫の中を見学し、見学を許されなかった貴重書庫の扉が、たまたま作業のため開いていたので、その前をわざとゆっくり通るなどして、うす暗い宝物殿”の中をうかがい見ることはできた。貴重書の保存についても興味のあるところだが、貴重書庫



写真3

は三層構造、床は桜材、壁と天井は檜でできており、曝書期間を除いて特に空調などはおこなわず、自然のままに保存しているとのこと。また、利用を制限し、できる限り代替物(マイクロ、影印版など)を用いることで後世へ伝えていくための保存を心掛けているとのことであった。

4 貴重書の目録

ひととおりの施設見学の後、瀬川氏から、貴重書の目録（主としてインキュナブラなどの詳細目録）についての解説をうかがった。天理図書館の貴重書目録はその質の高さで国内有数である。天理図書館の活動として目をひくのは、蔵書の質の高さ、多さだけでなく、それらを目録を含む各種刊行物によって、広く世間に知らせ、研究に役だてていることである。天理図書館の洋貴重書の場合、受け入れた資料は、まずOPACなどに対応できる簡易目録を作成し、その後、「稀書目録洋書之部」として冊子体の詳細目録を発行している。1989年に「天理図書館叢書第41輯」として、第4部を刊行しているが、現在は第5部の刊行を準備されているそうである。また、年2回刊行の紀要「ビブリア」への研究発表など、館員の研究活動も盛んである。98年3月からはインターネット上にホーム・ページを開設して、利用案内や資料紹介などをおこなっている。

5 貴重書の展示

天理図書館では、目録の公開とともに、所蔵資料の公開展示活動も常時行っている。図書館内部に常設展示室を持ち、また東京神田には天理ギャラリーを開設して、毎回テーマを変えて展示会を催している。

私たちの閲覧希望資料もこの常設展示室での閲覧となった。リストno. III-1「免罪符」については保存状態の都合で閲覧できなかったが、それ以外は貴重書庫より運びだされて展示されていた。瀬川さんが、実際に来なければ聞けないような資料購入にまつわる裏話などをまじえながら、資料の簡単な解題をして下さった。私が希望したのは、「きりしたん版」と「カトリコン」である。天理図書館は世界的な稀覯本である「きりしたん版」のうち「おらしょの翻訳」「こんてむつす・むん地」など8種を所蔵している。だが、天理図書館所蔵のきりしたん版は、すべて重要文化財指定。だめでもともと、といった気持ちで特に資料名を指定せず希望リストに入れたのだが、展示室には8種のうちの国字本、「太平記抜書」が展示されていたのである。この原稿を書くにあたって「図書の譜」前号の「シ

リーズ世界の図書館(1)大英図書館にて」をあらためて読み返したのだが、そこで紹介されていたのが、天下の孤本「天草版平家物語」であったことを思うと、ここでまた「きりしたん版」の名前が出てくるのは、私にとっては何か不思議な偶然に思える。刊地によって「天草版」あるいは「きりしたん版」と呼ばれる、これらの本の辿った数奇な運命が不思議な魅力を放っているのかもしれない。

残念ながら展示室の写真撮影は許可されなかったもので、その様子を紹介できないが、メンバーたちは皆、かなり長い間展示室におり、それぞれが希望した稀覯書に目を凝らしていた。

< 謝辞 >

今回の見学において、天理図書館の藤井さん、斉藤さん、瀬川さんをはじめ、資料を展示して下さいました方には、本当にお世話になりました。心より感謝しております。

【参考文献】

1. 濱田泰三編「やまとのふみくら」(1994, 中公文庫)
2. 天理図書館編「きりしたん版の研究」(1973, 天理大学出版部)
3. 天理図書館編「善本写真集」no. 1-48 (1953-80, 天理大学出版部)
4. 反町茂雄「一古書肆の思い出」(1986-92, 平凡社)
5. 反町茂雄「定本天理図書館の善本稀書」(1981, 八木書店)
6. その他